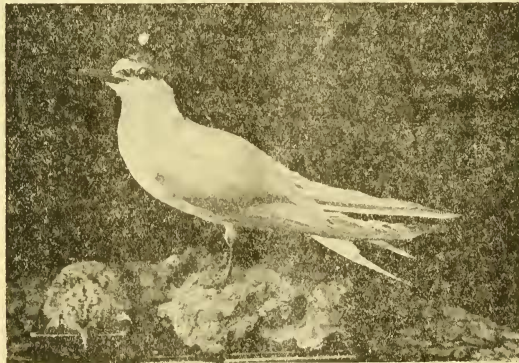
をお願する次第であります。

因に此クモは土中の生活者でありまして裏打はうすい乍らトタテグモ科の様な孔を穿ち立派に戸蓋を作つて居ります。普通に土居性のトタテグモの居さうな所を木の枝などで落葉を掃ふ様にして孔をみつけて採るのがよからうと思ひます。解剖及保存用の標品は普通の熱湯固定法で殺し固定して、六十%位の酒精に保存の事。生きたものは管瓶に入れ木栓で蓋をする代りに脱脂綿で固く栓を施して送つていただきたくあります、一週間位ならば死なないで着くと思ひます。　（岸田久吉）

○「コアサジシ」山形縣下に蕃殖す

『海產保護鳥類圖說』。『日本鳥類圖說』には「コアジサシ」の分布に就いて「本邦にては東京以南の地に產す」と記載しあり。本誌三百四十四號『埼玉縣下にて獲られたる海鳥』の記事の中には埼玉地方を以て本邦に於ける最北の捕獲地とせらるるが如く記載しあり。然るに本誌三百五十一號『山形縣庄內地方に珍しき鳥類』の記事の中に庄內地方にては六月の頃田植當時に水田の上を飛翔しつゝ餌を索むるを見る由を報せられたり。實際「コアジサシ」は山形縣村山地方に於ても珍しからず春季渡り來り六七月の頃最上川河岸の砂礫地に產卵育雛し秋季渡り去るを見る。寫眞は村山地方產「コアジサシ」成鳥（剝製）及び孵化後三四日の雛（生鳥）なり。　（石澤健夫）

○ヒヨドリの渡り

大正七年五月十六日以後、川口が若松公立第二病院前なる齋藤院長方に寄寓中、午前八時半頃、深町丘上の林中から高さ二百五十米突許の空中を、ヒヨドリ群が賑かに併し長閑に呼應しつゝ東北を指して移り行くのを度々認めた。注意してみると、毎日ではない。二日なり四日なりの間を隔て、而かも清穩な寧ろ多少蒸し暑さうな靜かな朝九時前後に限られてゐるやうに認められた。土地に慣れてゐなかつた川口は漸次に濃厚な注意を此等ヒヨドリの所作に向け始めた。

其中に端なくも、齋藤直、安西善三郎二氏から、左の二項を教へられた。

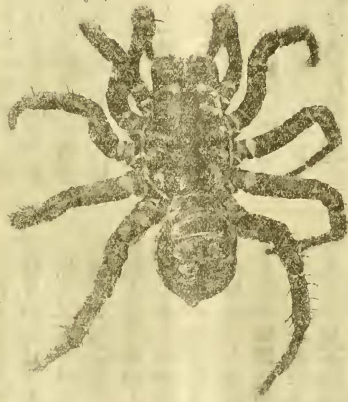
其一、豐前大里の西、延命寺附近燈臺所在地の突角の木立より彥島を指して、十數年前迄は、春末に、ヒヨドリ大群の渡りを見られたといふこと。但し現今では見るを得ないだらうといふこと。

其二、同じく豐前の卿崎から滿珠島を指して毎春末に渡る大群は、今尙ほ見らるゝといふこと。但し今や早や六月に入りしこと故。時期遲からむといふこと。

仍て來ん年を待つことゝ決心した。說明の便宜の爲に、前述其二を『卿崎の渡り』と名けん。此渡りに就いては、池村川口兩人兩回共に同行した。

蛛には Opisthothelæ (後方に蜘疣の有る類)と云ふ名を付けました。

日本には面白い此の Mesothelæ の蜘蛛は多分見付かるまいと考へられました。所が理學士奥村多忠氏の鹿兒島附近の蜘蛛採集品の中に *Latouchia* 屬のトタテグモの乾燥して縮上つたのがあつて分布學的に興味をそゝられたので、其の採集方を田崎友吉氏を介して江崎悌三氏に依賴して置いたが、同氏が鹿兒島を去られたため、更に同氏から木村有香(アリカ)氏に賴んでくれられ、數個のトタテグモ科及類似の蜘蛛を手にする事を得たので見た所當初希望のものゝ外に、意外々々極めて意外にも Mesothelæ の生きた蜘蛛雌の成體二疋がはいつて居る事を見出しました。由來現存 Mesothelæ = Liphistiidæのもので完全な標品と云うものは殆ど無いので奇麗な圖の出て居る報告も其本文には標品の不良な事を書添へてある樣な次第であります、小生の得たのは極めて完全なもので腹部下面後疣後方の腹板をも能く算へ得る程に立派であります。

此の日本產Liphistiid spiderは*Liphistius* Schiödte, 1849屬に近く而も、既知の三種(1. *L. birmanicus* T. Thorell, 2. *L. desultor* Schiödte = *L. mamillatus* O. Pickard-Cambridge, 3. *L. sumatranus* T. Thorell) とは明かに異なる種に屬し、殊に胸板 (cephalothoracic sternum) 及第二腹節の腹板及蜘疣に於て其の然る所以を示して居ります。故に發見者に敬意を表して「キムラグモ」*Liphistius? kimurai* K. Kishida と呼ぶ事に致したいと思ひます。同科の他の一屬は *Anadiastothele* E. Simon, 1903 と云ひ、スマトラ產の一種 *A. Thorelli* E. Simon を含んで居るだけであります。此の二屬の確固たる區別點は次の表の通りであります。

鹿兒島市に於て新に發見せられた原的の蜘蛛
（約三倍）

A. 前後兩疣(functional spinnerets)の第二節は長くて多數の annular rings を有して居り第一節は太いが半圓狀で短い……………リヒスティウス屬

AA. 前後兩疣には第二節は無く第一節は圓柱狀を呈して居ります……………アナディアストテレ屬

「キムラグモ」の解剖發生に依つて解決せられようかとも思はれる事が多いので單に珍しいものが日本の Faunaにはいつたと云ふ以外に非常な喜悦と希望を得ましたが、尚ほ雄も得たいし、分布や一般の習性をも知りたいから、茲に寫眞を挿み雜錄欄をふさいで御援助

させて居ます。是等の蜘蛛は腹部の上下兩面共に環節がはつきりわかつて居るので興味があります。現存の種類ではピナン、ビルマ及スマトラからの採集品でLiphistiidæと云ふ科が出來て居まして其科の全數二屬四種が古生代の化石の蜘蛛とは可成樣子はちがふが矢張り腹部に環節を示して居るため頗る學者の注意を惹いて居ます。

翻つて蜘蛛の個體發生を見ると其の胚體の腹部には明かに環節を表はし、其内の或者に於ては appendages をも生じて成體とは可也異なる有樣を呈して居ます。環節の數は略確實と認められる所だけを申すと、最少八個 (*Pholcus* → CLAPARÈDE, *Theridion* → MONTGOMERY, *Agelena* → KISHINOUYE., etc.) 最多十二個 (*Pholcus* → SCHIMKEWITSCH, *Trochosa*→JAWOROWSKY, etc.)、第四第五兩腹節の appendages は前疣、篩疣、間疣、中疣及後疣となつて多くは成體にも殘存して居り、篩疣、間疣は第四腹節の肢の Endopodite で互に homologous のもので前疣は其の Exopodite であり、中疣は第五腹節の肢の Endopodite で後疣は其の Exopodite であると云ふ事であります。

然るにサソリ、サソリモドキ、ザトウムシ、カニムシの如き Abdominal somites の distinct なものを節腹類 (Arthrogastrida) ダニの如き Abdominal somites の fuse して segmentation のあとさへわからぬものを球腹類 (Sphærogastrida) と云ふ風に蜘蛛綱(アラクニダ)を分類した書物が隨分あります、而して蜘蛛が球腹類へ編入されてあるのに普通には誰も不思議がらぬのは何うしたものでせうか。素より個體發生に於て胚の時代に環節があつたところで成體になつて之を見ぬのが一般な場合球腹類の名は差支無いとして宜しいでせうが、Arthrolycosidæ, Liphistiidæ の樣に成體で判然と背板 (Tergal plates) 腹板 (Sternal plates) が體節を示して居る場合球腹類の名は問題にせられざるを得ないわけであらうと思ひます。

偖て又吾等は環節結構 (Metamerism or Segmentation) の進程が Homonomy から Heteronomy に向う事を一般の原理として承知して居ます。其所で個體發生の知識から推して多くの普通の蜘蛛に於て蜘疣が腹部後下端に存在する事を Heteronomy のためと説明して居ますが、環節結構の原始的なものに於ては蜘疣は第四第五の腹節の肢であるとの個體發生上の知見に據つて當然蜘疣は腹部下面の中央に在るべき事を推定するのであります。Arthrolycosidæ の化石蜘蛛では保存が不良で遺憾乍ら蜘疣の事は全くわかりませぬが、それよりもいくらか heteronomous に向ひ less hononomous になつて居る現存の Liphistiidæ では仕合せにも吾等は此推定を顯著に裏書きして居る所の蜘疣を見得るのであります。REGINALD INNES POCOCK 氏は此蜘疣の位置に基づいてリヒスティウス科を非常に重要視し眞正蜘蛛類を大別して二類とした時 Mesothelæ (中程に蜘疣の有る類) と云う名を命じ、他のすべての蜘

に就きて尋ねたるが其の云ふ所によれば亞港に於ける兵舍の建築は既に開始せられたり而して其の法は露西亞人式にして丸木を積み重ねたるものなりと仍て尙ほ精細に聽き質したるに前擧大泊中學校舍と同一樣式にして丸木の上下兩面を削りて其の接觸部を平面となせるものなりと云へり尤も當人は一視察員なるが故に觀察の誤りなきは保證し難しと雖も今將に我同胞將卒が寒威凜烈たる北地に於て越冬するの用意をなす場合なれば防寒の設備の如きも注意の上にも注意を要す可き今日に當り上述の如き報告に接しては之を輕々に看過するは我同胞に對して不親切なるの感を強くしたれば一言當局に具申し置きたる次第なり之を建築上の擬態と名づく。

猶ほ冬期樺太に於ては暖房設備はペーチカ（又はペチカ）を主とすれども之れ亦露西亞人樣式の天井の低き家屋に於て始めて有功にして大泊中學校の校舍の如き天井の高き室に於ては其の保溫功力が頗る薄弱となるの事實もありこれ亦當事者の一考を煩はし度き所なりとす。

玆に附記す可きは樺太の住民が何故に保溫上極めて有功なる露西亞式の家屋を造らずして彼の寒地に於て猶ほ內地に於けると同樣の暖地的家屋を建設するやの點にありこれ眞に考へざるの甚たしきものなり寒地に於ては宜敷寒地に適應したる家屋を造り其の地に永住の計畫をなすに非ざれば我國北門の警備上又は產業發展上の功果を十分に顯はすことを得ざるを患ふるものなり。

○榮濱の鱒　大泊港より北方五十七哩餘の所に榮濱あり南樺太の東海岸に位し樺太鐵道の北端終點なり此の地に着して山口旅館に投宿す其の日直に海岸を踏査したるは云ふ迄もなし其の夜宿の主人來りて談數刻に及ぶ明日は內淵川に鱒釣を試みんと此の主人は明治三十八年樺太占領當時より在住の人にして嘗て人類學の大家故坪井正五郎博士が始めて樺太に赴きし際此の旅館に泊し主人の案內にて土人部落を巡覽したることありと而して明日も自身案內の任に當る可しと尙ほ數日前には東北地方の某師範學校の先生が僅々二三時間にして鱒數十尾を釣りて歸れりなど云ふ釣魚界の重鎭飯島魁博士の來られんにはなど思ひて寢に就く翌朝四時半頃（南樺太に於ける當時の日出時なり）起き出づれば降雨甚だしく市街一面の水は將に車軸を沒せんとするの狀態にて海岸採集の內淵川の鱒釣も問題にならず仍て豐原に赴かんと午前九時の汽車に乘りたり其の落合驛を過ぐ，頃降雨の勢稍衰へたりと雖も此の邊は低地にして線路附近に浸水家屋數戶を見たり正午豐原驛に着し花屋旅館本店に投宿翌朝に至り榮濱行汽車不通の報に接したり。（以下次號）（飯塚啓）

●原的の蜘蛛日本にも產する事

古生代石炭紀に產出する化石の蜘蛛に *Arthrolycosa, Eocteniza, Geralycosa, Perneria, Protolycosa, Racovnicia* の六屬十三種がありまして Arthrolycosidæ と云ふ科を成立